

「マゼラン世界周航五百年(1)」(2018年10月29日)

フェルディナンド・マゼランのスペイン船隊による世界周航は1519年8月10日にセビリアを出帆することでその端緒についた。5百年前に行われた人類初の世界一周航海は、地球というものの規模を確認する上で多大な貢献をもたらしたと言えるだろう。その5百年が経過したことを記念して、来年は記念航海が計画されているようだ。マゼラン船隊が立ち寄った北マルク州ティドーレ(Tidore)島もその祝祭から無縁ではいられない。というのも、マゼランの世界周航は東インドにあるスパイスの産地への航路を発見することが最有力の動機だったのであり、香料諸島がその壮挙の第一の誘因であったことは紛れもない事実なのだから。

北マルク州の中核をなしているハルマヘラ島の西側に南北に並んでいる島々が香料群島あるいはモルッカ諸島と昔呼ばれていた地域だ。もともとはテルナーテ、ティドーレ、モティル、マキアン、パチャンと連なる一群の火山島がモルッカ諸島と呼ばれ、この地域原生の香料植物が貴重な資源として世界中でもてはやされた。特にヨーロッパでの需要が大きく、マレー半島～インド～アラブ～エーゲ海～ベニスというルートを経てヨーロッパに流れ込んでいくスパイスは、そのルート沿線の住民たちに大きな経済上の利益をもたらしていた。

しかし時代が下ってくるにつれて、モルッカという名称は北マルク州地域一円からさらにセラム島アンボン島一帯にまで拡大し、北マルク州分離依然のマルク州という地域全体を包む呼称となったのである。

スパイス交易ルートを握っているアラブ人とベニス人の手から独占権を奪おうとしてポルトガル人が動き始めたのは、イベリア半島からのイスラム勢力駆逐と国家経済を富ませるための富国強兵的独立国家方針の結果だった。小国ポルトガルはそれを国家プロジェクトとして開始した。こうして大航海時代が幕を開く。

4隻編成の小船隊でリスボンを出帆したヴァスコ・ダ・ガマは1498年5月、インドのカリカットに到着してヨーロッパとアジアを結ぶ航路をはじめて確立させた。それ以来、ポルトガル人は繰り返しインドに強力な船隊を派遣してコショウを中心にスパイスの入手に努め、その一方でアジア経営の根拠地を設けるべく戦闘を重ねて1510年2月にゴアを陥落させた。以来、ゴアがポルトガル人のアジア経営根拠地となる。[続く]

「マゼラン世界周航五百年(2)」(2018年10月31日)

インド進出の動きが展開されている中、次のターゲットであるマラッカ獲得の動きが開始され、1509年にロペス・デ・セケイラ率いる小船隊が初のマラッカ訪問を実現させた。

セケイラはマラッカのスルタンと貿易協定を結び、商館を設けるために部下の一部を上陸させていたが、インドでポルトガル人が何をしてきたかを知っているマラッカ在住のインドやジャワのイスラム商人たちがスルタンに力づくでポルトガル人を打ち払うよう密かに進言し、進言を取り上げたスルタンが不意打ちの夜襲を行なった。その結果、セケイラの船隊はマラッカ脱出を余儀なくされ、陸上に取り残されたポルトガル人は捕虜となって投獄されたのである。

ゴアの第二代インド副王アルフォンソ・ダ'アルブケルケは1511年、自ら16隻の船団を率いてマラッカに向かい、圧倒的な軍事力でマラッカを陥落させた。マラッカはポルトガル領にされ、更に東や南に向けて探査と征服行動を行うためのポルトガルの前進基地となった。いよいよ香料諸島に王手をかけるための環境が整ったのである。

香料諸島を目指すそんな流れの中で、マゼランと従兄弟のフランシスコ・セハウン(Francisco Serr?o)は早い時期からその国家プロジェクトを推進するひとびとの中にいた。インド航路が発見されたあと、インド洋の覇権を手にするべくポルトガルが1505年に派遣したフランシスコ・デ・アルメイダの20隻の船隊の中に、ふたりの姿があった。

香料諸島からジャワ海～マラッカ海峡を通過し、インド洋北岸の諸港からペルシャ湾岸やアラビア半島の諸港に流れる、スパイスロードと呼ばれるその海上交通路に割り込んできたポルトガル人を、既存商権を守ろうとする地元諸侯が単独あるいは同盟を組んで排除しようとしたため、インド洋での戦争が続けられた。ポルトガル人はインド洋の制海権を確保するかたわら、マラッカをおさえるために次の手を打った。[続く]

「マゼラン世界周航五百年(3)」(2018年10月31日)

マゼランとセハウンはセケイラ船隊のマラッカ訪問に参加し、危機一髪のところをゴアに戻ることができた。お礼参りとばかりの副王アルフォンソ・ダ'アルブケルケが自ら指揮したマラッカ攻略戦に従事した後、マゼランは帰国の途に就き、1512年にポルトガルに戻っている。

1511年11月にマラッカは香料諸島を目指す初の探査船隊を送り出した。デ・アブレウ率いる3隻の船隊の中の一隻を、フランシスコ・セハウンは船長として指揮した。マラッカで雇った水先案内人に導かれてデ・アブレウ船隊はジャワ海を東航し、東ジャワのグルシツ(Gresik)に立ち寄った。セハウンはそのとき地元の女を妻にし、香料諸島へ伴っている。船隊はそこからマルクのバンダ島に進路を定めた。

バンダ島は当時マルク諸島におけるスパイス集散地であり、ポルトガル船隊はバンダで交易を行なって望む積荷を手に入れた。ところが、帰途セハウンの船は暴風雨のために難破してアンボン島のヒトウ王国に漂着したのである。ヒトウで優遇されたポルトガル人はヒトウとセラムの戦争でヒトウ側を助け、ヒトウ人から大いに感謝された。

ジャワ島から北マルクの諸王国まで幅広く交流していたヒトウ王国は、掌中の珠となったポルトガル人をテルナーテ王国に譲った。ポルトガル人が示した武器や戦闘能力の優秀さがかれらを引く手あまたにしたことは疑いあるまい。ポルトガル人と引き換えにヒトウ王国が何を手に入れたのかはよくわからないが、きっと損のない取引だったことだろう。

当時のモルッカ諸島はテルナーテ、ティドーレ、ハルマヘラ島西岸のジャイロロという三王国が三つ巴で争っていた時代であり、特にテルナーテとティドーレは不倶戴天の敵という間柄にあったため、テルナーテのスルタンはセハウンとその部下たちを手に入れると共に、ポルトガル人に軍事支援を求めて難攻不落の要塞建設を依頼した。ポルトガル人がふたつ返事で引き受けたのも当然だ。

こうしてセハウンはテルナーテのスルタンの政治軍事顧問となり、テルナーテに住み着く。セハウンはスルタンの信頼を得て、スルタンの娘のひとりをも妻にしたという話もある。[続く]

「マゼラン世界周航五百年(4)」(2018年11月01日)

マラッカはかれを通じてテルナーテ王国との関係を深めて行った。友好通商協定が結ばれてスパイス入手と軍事基地の強化が進められ、スルタンの思惑から外れた支配被支配関係がいつのまにか両者の間に強まっていく。

テルナーテのスルタンがいつになって自分の愚かさに気付いたのかよくわからないが、どうしようもない状況に至ってかれは憎しみをポルトガル人、中でもその立役者だったセハウンに

向けたようだ。もっとあとの長い時代に次々にやってきたヨーロッパ人の硬軟織り交ぜた手練手管によって地場支配権を篡奪されるようになる東インド諸島の事始めがこの不運なスルタンだったのではあるまいか。

セハウンは1521年にテルナーテで不可解な死を遂げたことが記録に残されている。それをテルナーテのスルタンによる毒殺だったとしている説もある。その説を決して不自然なものに感じさせない軋轢の存在は容易に想像し得るものであるにちがいない。

テルナーテでセハウンに会うためにはるばる大西洋と太平洋を越えてやってきたマゼランが一步手前のフィリピンのマクタン島で1521年4月に死を迎えたのと、セハウンの死はあまり大差ない時期だったようだ。奇遇と言え言えなくもない。

ともあれ、スルタンがセハウンに操縦されている間のテルナーテ王国を根拠地にして、ポルトガル人がモルッカ諸島の物産をできるかぎり自分たちの手中に収めていた十年間、リスボンは大いなる繁栄にうるおった。そのころセハウンが故国のマゼランに宛てて送った手紙には香料諸島の様子が詳しく記されていて、香料諸島への夢をマゼランの心に掻き立てることになるのである。

帰国していたマゼランはモロッコで軍務に就いたが不慮の陰謀で評判を落とし、1514年以降、船に乗り組む誘いは一切、かれのところに来なかった。そのうちにセハウンからの手紙が届き、香料諸島への夢を確信したかれは太平洋を渡ってテルナーテへ向かう航路を開く方がよいことをポルトガル王に献言した。そのための船と乗組員をわたしに与えよということだ。ところがマヌエルー世はそれを言下にはねつけた。[続く]

「マゼラン世界周航五百年(5)」(2018年11月02日)

テルナーテへ行ってセハウンに会い、スパイスを満載してヨーロッパに戻ろうという計画はポルトガルで実現不可能だと考えたマゼランは、コロンブスの故事に倣うことにした。

つまりスペイン王に船と乗組員を用意させてスパイスを山分けにしようという方法だ。こうしてローマ教皇がスペインに与えた世界の西半分を通過してテルナーテへ向かう世界周航の計画が煮詰められていったのである。

一説では、ヨーロッパで黄金以上の価値を持つスパイスの産地の支配階級のひとりとなってその地の王と並び立つような地位を獲得したセハウンに倣おうという気持ちだが、セハウンの手

紙を読んだマゼランの心中に育って行ったのではないかという話だ。もしもマゼランが香料諸島まで生き延びてそんな方向へ動き出していれば、マゼラン船隊世界周航は起こらなかったかもしれない。

スペイン王が用意した5隻の船と270人の乗組員は1519年8月10日にセビリアを出帆してグアダルキビル川河口のサンルカルデバラメダに至り、9月20日にそこから海洋に乗り出した。それがマゼラン船隊がスペインを後にした日だ。

乗組員の国籍はマゼランが連れて来たポルトガル人のほかにスペイン・イタリア・ドイツ・ベルギー・ギリシャ・イギリス・フランスなどの混成集団だった。ポルトガル人の数が目に余ったため、スペインの官憲は一部をスペイン人に交代させている。最終的にポルトガル人は40人ほどに納まったようだ。

大西洋で2隻が欠けた船隊は、3隻で太平洋に乗り入れた。1520年11月28日のことだ。北西に針路を採った船隊は1521年2月13日に赤道に達し、3月6日にグアム島に着いた。

3月16日、船隊はフィリピンのホモンホン島に到着した。150人まで減った乗組員が、最初にフィリピンの土を踏んだ西洋人となった。ホモンホンの領主はセブ島に一行を案内し、セブ王は一行を歓迎したため友好関係が築かれた。ところが、かれらはマクタン島の領主と敵対関係にあり、マゼランは敵を撃滅するよう依頼される。[続く]

「マゼラン世界周航五百年(6)」(2018年11月05日)

1521年4月27日朝、マゼランが小戦隊を率いてマクタン島に上がったところ、現地領主の軍勢と戦闘になってマゼランはそこで戦死するのである。指揮官と多数の乗組員を失った船隊は、1隻を焼却して2隻に減らし、西に向けて航海を続けた。パラワン島を経てブルネイに至り、そしてやっと11月6日に念願の香料諸島に到達する。

スペイン船隊からマゼランがいなくなった今、残った者たちがポルトガルの支配下にあるテルナーテに近付けるわけがない。船隊は11月8日にティドーレ島に上陸して、テルナーテと戦争状態にあるティドーレのスルタンと親交を結び、大量のスパイスを手に入れた。こうしてポルトガルを後ろ盾にするテルナーテと、スペインのバックアップを得たティドーレの対立という形が出来上がって行く。

12月中旬に2隻はティドーレ島を後にしてスペインへの帰国の途に就いた。ところがしばらく

して、1隻が浸水したのである。無事な船に人間と貨物をすべて移す余地はない。浸水した1隻は修理せざるを得ないのだ。

無事な1隻はインド洋を渡る単独航海に移った。船長エルカノが指揮するこのビクトリア号が1522年9月6日にセビリアに帰還した。ほぼ三年間の世界周航だった。

一方浸水したもう一隻は1522年4月6日、ポルトガルの支配海域を避けて東に向かった。しかし不運は続くものだ。航路を見失い、悪天候に見舞われて、船は再びティドーレに戻って来た。折しもポルトガル側はスペインのために働くマゼランを逮捕するため、ティドーレに船を送っていた。そしてそこでポルトガル船はスペインの老朽船と瀕死の20人を発見したのである。すべてはテルナーテに移されたが、船は嵐で粉碎されてしまった。

ともあれ、ティドーレのスルタンと渡りをつけたことから、スペインはマゼランの航路をたどって何度かティドーレに船を送った。要塞がいくつか建設されて、スペイン人守備隊が駐屯した。1527年から1534年まで、スペイン人は後続する支援のないまま、ティドーレで踏ん張り続けた。

しかし東からやってくるスペイン船を目の仇にしたポルトガル側はそれを教皇の定めた世界分割違反としてクレームをつけ、1529年にサラゴサ協定を結んで金で決着させた。だが、隙あらば力づくで、という時代の間人が一筋縄で行くわけがなく、ティドーレのスペイン要塞は維持され続けたのである。[続く]

「マゼラン世界周航五百年(7)」(2018年11月06日)

最終的にメキシコから遠すぎる要因がスペイン側の足かせとなり、結局1534年にスペイン人はティドーレから追い払われてしまう。その後1544年にスペイン軍はふたたびティドーレの要塞にやってきてスペイン国旗を掲げたものの、1545年にまたポルトガル人に屈服した。

スペイン人が再び東南アジアに手を伸ばそうとしたとき、まずフィリピンがそのターゲットにされた。1565年にセブ島を支配下におさめ、ルソン島に向けて支配を拡大し、1571年にマニラを手に入れてフィリピン支配の根拠地にした。それ以来、アジアの物産がマニラを經由してメキシコへ流れるルートが誕生した。スペイン人はメキシコで採れる銀で貨幣を鑄造し、それで代金を支払ったため、メキシコ銀貨が東南アジア諸港における基軸通貨のひとつになった。そんなマニラからスペイン船隊が強力な侵略軍を運んで香料諸島にやってきたこともある。

スペインのポルトガル併合、イギリスとオランダの香料諸島進出といった激動の中で、最終的にオランダVOCが香料諸島の支配を確立し、スペインはフィリピンの経営、ポルトガルはティモールの経営に集中することになっていく。

ヨーロッパ人がやってくる以前の地場諸王国間の覇権をめぐる争いから始まって、ヨーロッパ人が渡来するようになって以降も地場諸王国の争いと敵対が継続する一方で、ヨーロッパ人の間でも支配権をめぐる争いと敵対が続き、それが地場諸王国間の争いに更に複雑な要素を付け加えて、折に触れて同盟者と敵対者が入り乱れる戦争がさまざまに起こった。テルナーテ～ティドーレ～ハルマヘラがスパイス貿易のセンターを成していたことがそのような複雑な歴史をその地方に歩ませた原因であったにちがいない。

その要因こそがマゼランをそこに招き寄せ、歴史の必然がマゼラン船隊の世界周航を実現させたと言えないだろうか。ティドーレはマゼラン就航500年記念の世界催事に、「東西文明の接点」と題したテーマで参加することになっている。西からやってきたポルトガル人と東から来たスペイン人が相まみえたのが東西の接点であるなら、インドネシアでヨーロッパとインドネシアの文明が溶け合った場所がインドネシアにとっての東西文明の接点であったとも言える。[続く]

「マゼラン世界周航五百年(終)」(2018年11月07日)

文明の溶け合いをスパイス・商業・軍船・異民族の侵略・戦争・覇権争奪といった要素の中に探しても、たいしたものは見つからない。スパイスの交易センターはとりもなおさず商業の中心地なのであり、周辺の異民族は元より、はるか遠くの諸民族までがそこへ引き寄せられてきた。そうして異民族間の混血と文化の融合が起こったのである。

ポルトガル人やスペイン人が七つの海に雄飛したとき、かれらは出先の国で地元の女に子供を産ませた。その子孫がメスティーソと呼ばれている。これはスペインとポルトガルの間で綴りは異なっても類似の発音がなされる同じ単語だ。

その言葉自体に特定の種族民族を指す含蓄はなく、混血の人間や動物に対してジェネラルに用いられる言葉らしい。だから、ポルトガル人がマラッカでムラユ人に産ませた子供も、アメリカ大陸と同じようにメスティーソと呼ばれることになる。

テルナーテやティドーレの原住民がメディテラニアンコーカソイドの遺伝子を持っていることはエイクマン分子生物学研究所が既に発見して報告している。セハウンが、かれのポルトガル

人部下たちが、マゼラン船隊のヨーロッパ人たちが、香料諸島の原住民に遺伝子を植え付けた可能性は大いに考えられることなのだ。

文明の接点では遺伝子混入が生じるのである。もちろん遺伝子が混入されたところで、それだけでは何も変わらないことを過去の歴史が証明している。変えるためには人間の養育教育を変えて行かなければならない。

人類がいま進んでいるのは統一文明への道であると考えられている。文明の接点を増やすことは、そのゴールに至る効果的な布石のひとつではないだろうか。土地に縛り付けられている閉ざされた文明文化の枠を融和的に広げて行くための駆動力をそれはきっと提供してくれることだろう。[完]